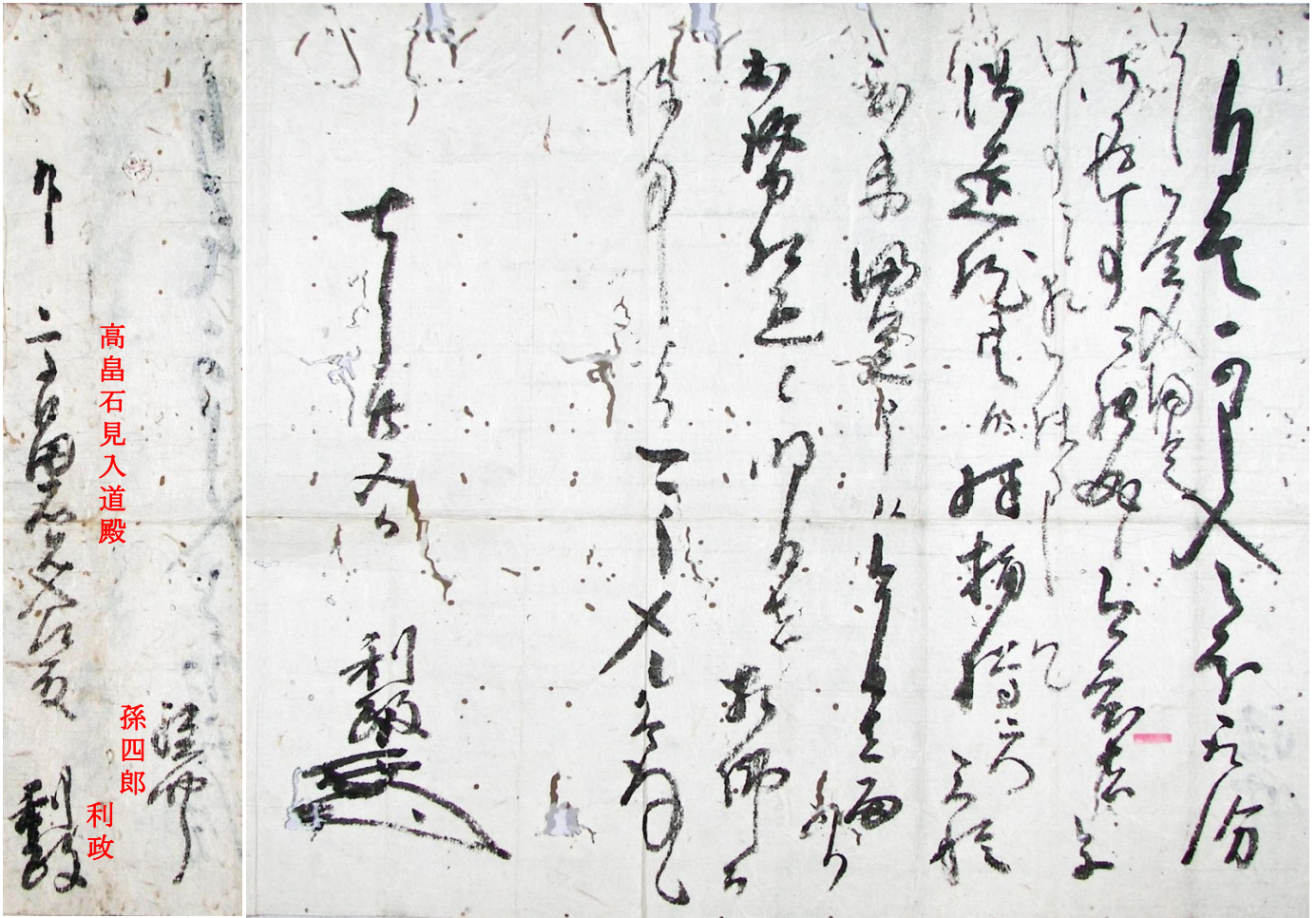


平成24年度

夏季展

高畠家文書展



〔裏書〕

前田利政書状(桶、樽到来につき) 090-1286-5

七月廿五日 利政(判)

自是可申入候処、取紛
 御返事ニ罷成候、今度者□
 御□□無候、殊桶・樽二つ三種
 到来満足申候、今日者雨ふり
 出勢相□候、明日者相払候而
 陳中より可申入候、恐々謹言

平成24年

7月10日(火)

～ 9月 9日(日)

玉川図書館近世史料館

はじめに

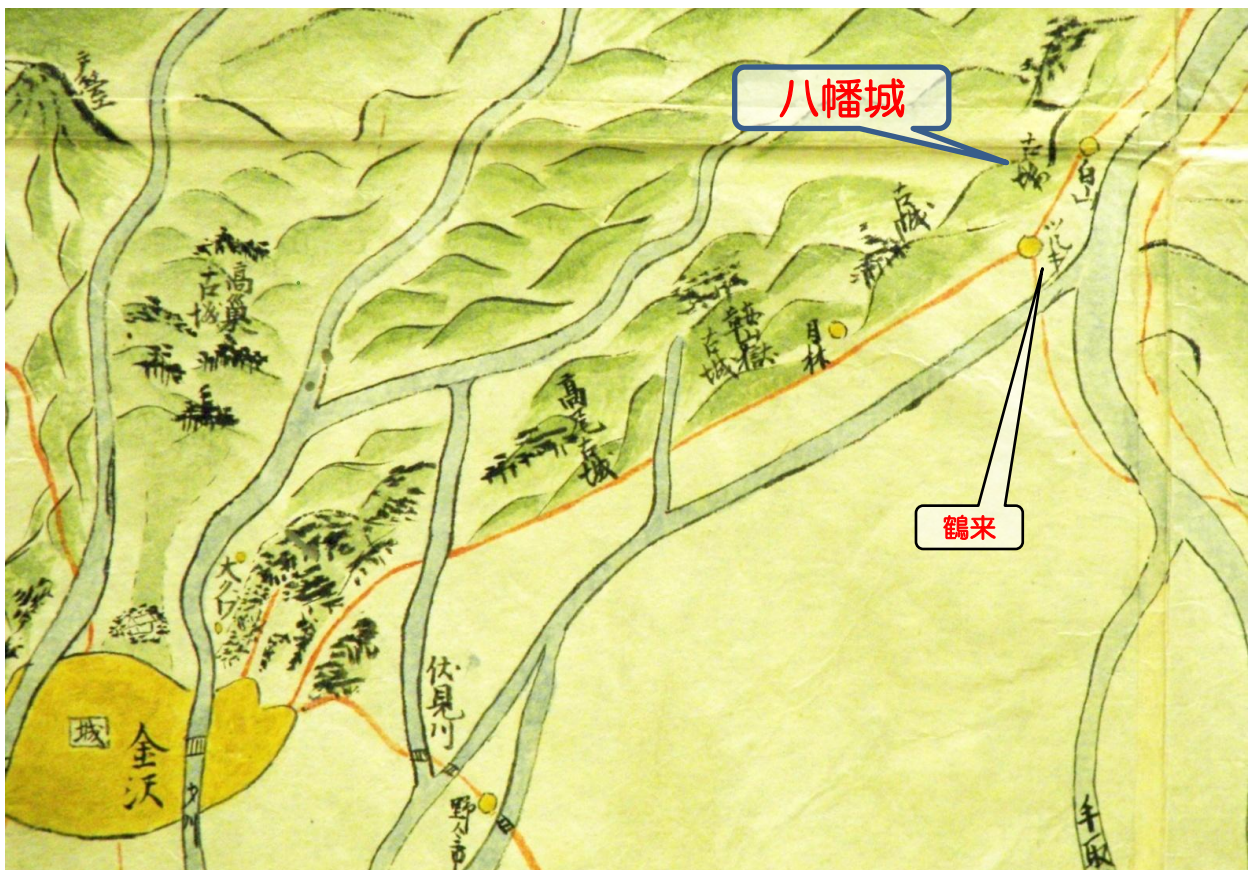
高島家文書(090-1286)は、幕末維新期に加賀藩の北越戦争で小川隊の小隊司令役として活躍した高島全三郎有恒家に伝えられた文書(149件175点)である。有恒は高島権兵衛家の家系で、文書群の主体は権兵衛家や有恒に関係する物であるが、約20点は前田利家の重臣で八幡城の守将を任された高島石見守定吉(一万七千石)およびその末裔である五郎兵衛家に関わるものである。

今回の展示はこの五郎兵衛家に関する文書を主体に展示するが、権兵衛家と五郎兵衛家は江戸時代中期以降、男子を養子にすることにより互いに家を存続させてきた関係であり、幕末から明治期の当主であった政徳と定辟はともに高島家の歴史を調べ「高島家系図」(16.31-130)を成している。また、政徳の弟である有恒は北越戦争での功績により新知150石を与えられ新たに家を立て、その後陸軍仮中尉や前田家の家従を勤めるなど明治以降栄えた家でもあった。このような状況の中で有恒家に五郎兵衛家の文書の一部が伝えられたのである。

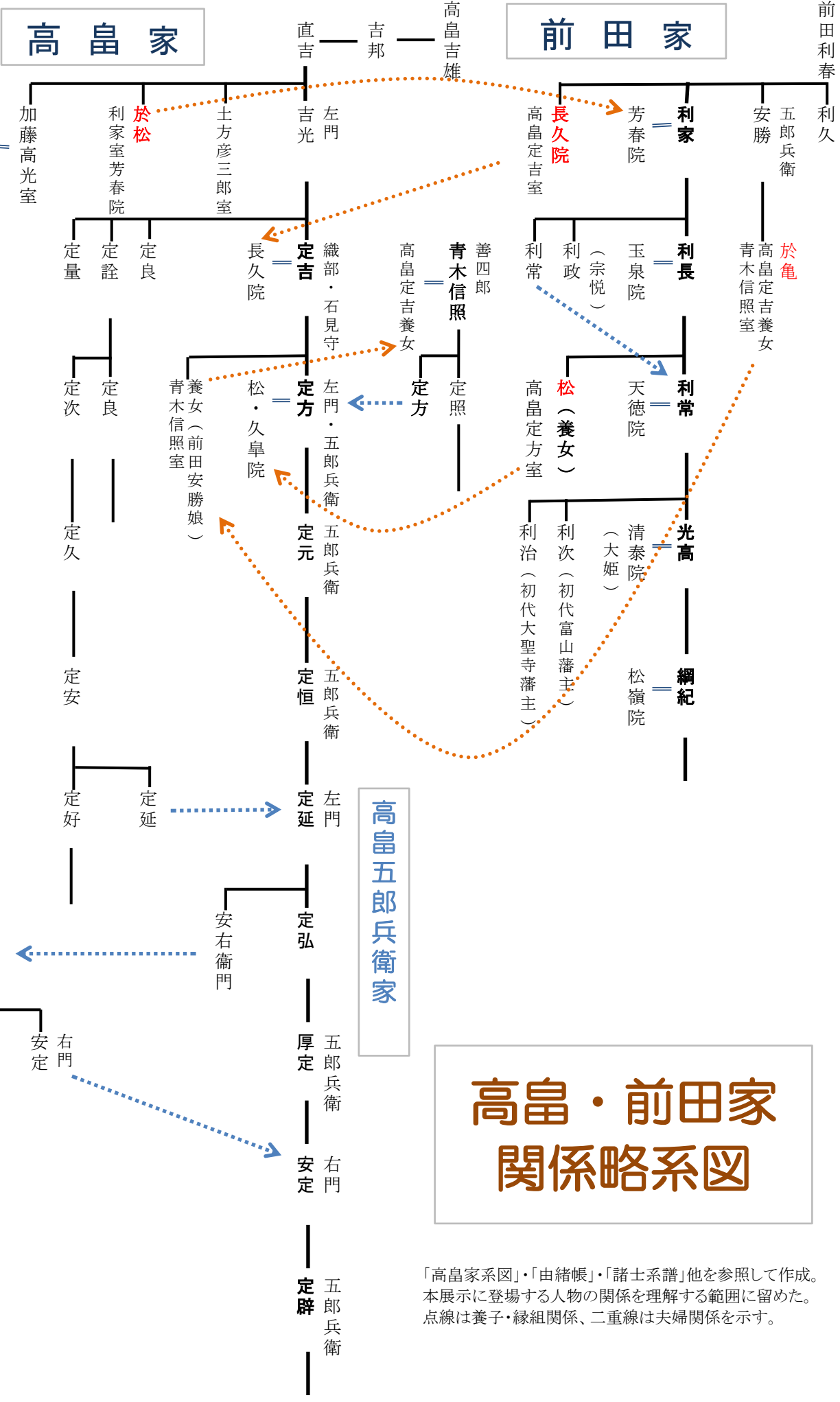
天正～慶長期における高島石見守と前田利家・利長との史料については『加賀藩史料』(第1編昭和4年)では「高島氏所蔵文書」、『加能古文書』(昭和19年 増訂版昭和48年)では「高島文書」と文書群名が表記されている。これらの文書は明治期以降も五郎兵衛家に伝えられたものと考えられ、有恒家に伝えられた文書は含まれていない。しかし有恒家に伝えられた文書の一部は、藩政期に編纂された「菅君雑録」などに写され、史料の存在については知られていたものが含まれている。

高島石見守定吉と加賀藩主前田家との関係は尾張荒子時代から始まる。定吉の室は利家の妹、利家の室芳春院は定吉の叔母であり、定吉の跡を継いだ定方の室は利長の養女であった。深い姻戚関係のもと高島家には藩主の書状などが多く残されたのである。

本展示では藩主の書状を中心に藩政期前後の高島家の一端を紹介するものである。



加賀国古城跡之図(16.84-136)



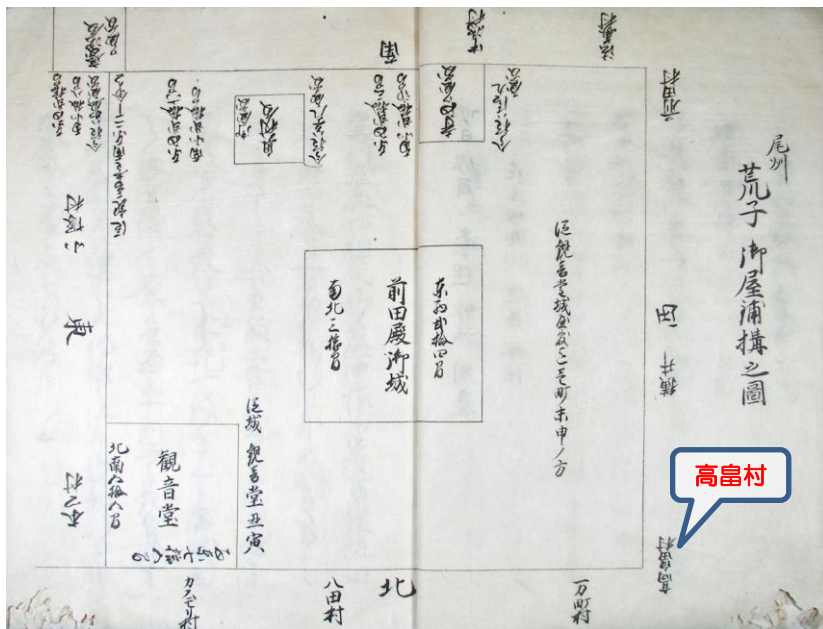
高畠権兵衛家

高畠五郎兵衛家

高畠・前田家 関係略系図

「高畠家系図」・「由緒帳」・「諸士系譜」他を参照して作成。
本展示に登場する人物の関係を理解する範囲に留めた。
点線は養子・縁組関係、二重線は夫婦関係を示す。

高富左京太夫
 左京
 自鎌倉後尾山田郷高富村に居を構えた。左京太夫直邦は斯波から織田家の家臣となり、家名を居所の村名から付け、左門吉光は織田家に仕えた。吉光の嫡男定吉は、初め孫十郎後織部、石見守を名乗る。諸説あるが「荒子伝来譜代」では前田利家が家督を継ぐ以前に召し抱えた者としての荒子七人衆に定吉が含まれている。



乙酉集録(16.31-89①)

当邦諸侍系図(16.31-44③)

今枝直方 宝永2年(1705)

荒子七人衆は天文7年(1538)利家公御部屋住り御願の家御相續ノ御一ツノ被召仕人々
 中比織部後石見守
 此乃縁人ニ有之孫十郎嫡家ノ今ノ左門
 高富孫郎定吉
 中比又兵衛後豊後守
 村井長郎長

荒子御伝来譜代(16.31-40)

高富家系図によると、鎌倉住の吉雄から始まり、左京太夫吉邦は斯波氏に仕え、尾州山田郷高富村に居を構えた。左京太夫直邦は斯波から織田家の家臣となり、家名を居所の村名から付け、左門吉光は織田家に仕えた。

吉光の嫡男定吉は、初め孫十郎後織部、石見守を名乗る。諸説あるが「荒子伝来譜代」では前田利家が家督を継ぐ以前に召し抱えた者としての荒子七人衆に定吉が含まれている。

右高富侍家系圖如此御座候此外廢流合知
 或新知被召出候者有之候共断絶等之家
 省之置候也
 明治二十三年十二月
 高富政徳
 高富
 高富 辟

高富家系図(16.31-130)

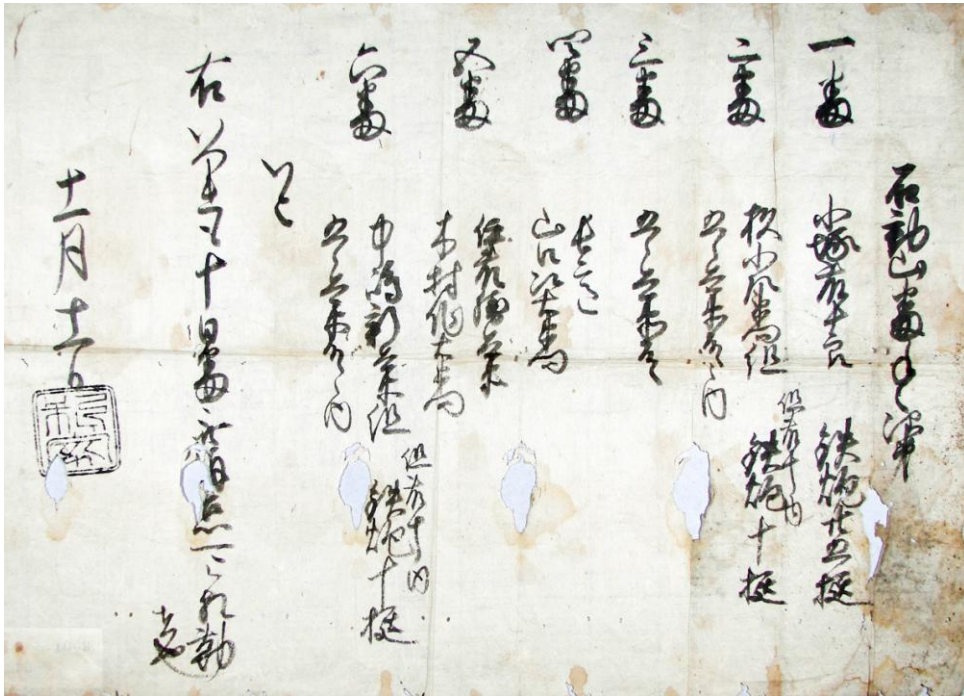
廿八日 利家公利長公金沢ニ留テ國副夫々ニ被仰渡入干城ヲ要害等御一覽追々御仕置嚴重也
 此年 五月御領國所々ノ城々一人數ヲ被置城代ヲ被定府中ヨリ追々引越夫々入干城
 七尾城 前田右衛門主安勝
 末廣城 奥村助左衛門永福父子
 七尾城 土肥伴与次
 招仁城 千秋且殿放能富
 八幡城 徳山三三治
 高富織部定吉
 津橋城 前田右近衛秀徳

菅君雜録(090-581①)

菅君雜録一
 天文七戌戌年正月
 利家公尾刈海道郡荒子城
 當城構東西北
 間一重堀荒子村成御誕生十二月廿五日
 亥ノ方ニ當レリ
 天正六年八月八日
 犬千代君御母公笹原万阿弥女野
 荒子村ト前田村

「高富家系図」は五郎兵衛家の定辟と権兵衛家の政徳が明治23年(1890)に著したものである。二人は明治3年の由緒帳では45歳と42歳であった。「菅君雜録」は五郎兵衛家の左門定延が、天文7年(1538)前田利家誕生から延享4年(1747)までの事を編年で著したものである。

高富定吉は天文5年生まれ、若年より利家に仕え、利家が前田家の家督を継いだ永禄12年(1569)には200石、天正3年(1575)利家が織田信長から越前府中3万石余を封されたとき、利家から800石拝領し、この頃利家の妹(長久院)を娶ったとされている。天正9年利家が能登の領主となり、その後天正11年加賀国石川・河北両郡を豊臣秀吉から与えられたとき、定吉は利家から八幡城に配されている。文禄3年(1594)に叙爵し石見守となり、石高は1万7千石となった。



前田利家印物 石動山番手之次第 (090-1286-1)

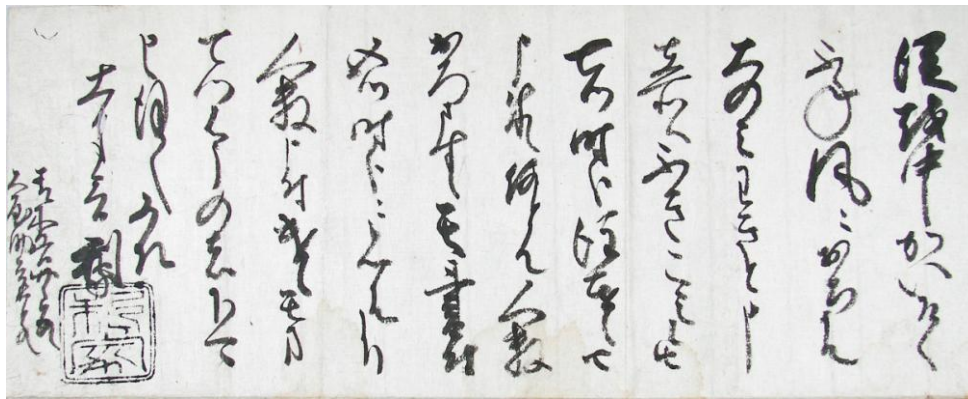
天正10年(1582)6月2日本能寺の変により織田信長が亡くなる。

織田軍として越中魚津城で上杉軍を攻めていた利家は兵を引いた。能登畠山氏の旧臣温井・三宅党は上杉軍の支援を得て、石動山に登り、信長に領知を没収された天平寺の衆徒とともに反乱の気運があがった。

利家は石動山を攻め焼き払っている。そのときの先陣が高畠定吉であった。

「番手」とは城に在番して防備にあたる武士のことである。この史料は石動山を攻め落とした後のもので、利家が石動山防備のため6組の番手を定めたものである。

なお、「三番 五郎兵衛殿」は利家の兄前田五郎兵衛安勝である。



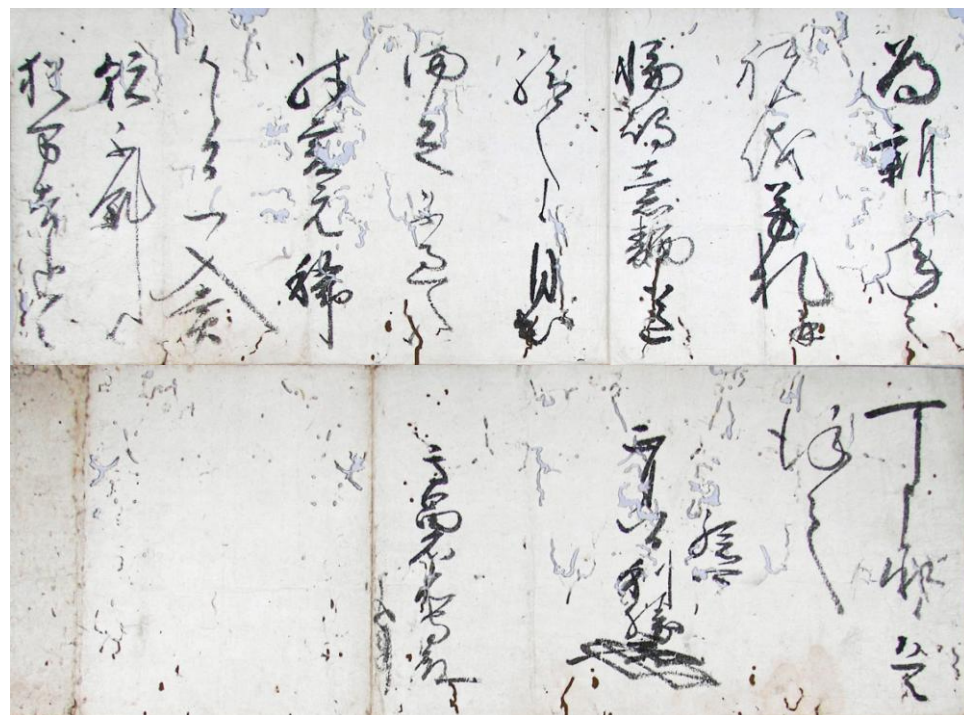
前田利家印物 越中海賊船につき (090-1286-2)

利家が越中の佐々成政と争っていた、天正12・13年(1584・5)頃の史料である。

越中からの「かいそくふね」(敵対する賊の船)に備えるよう、能登を衛る青木善四郎・大屋助兵衛に申し付けたものである。

青木善四郎は初め織田信長の家臣、後に利家に仕え、天正18年関東征伐のとき戦死。

なお、善四郎の次男定方は高畠定吉の養子となり、高畠家を嗣ぐ。



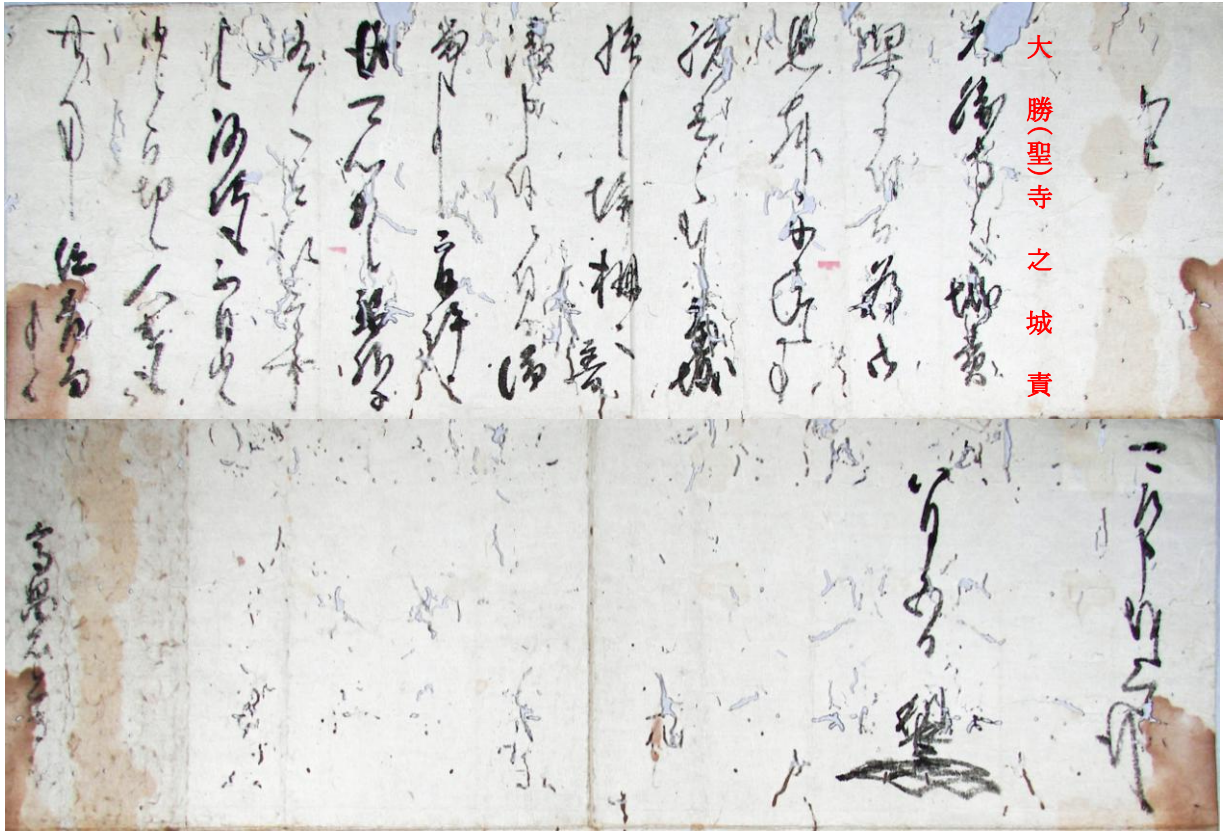
前田利長書状 新年祝儀輪島素麵受取につき (090-1286-3)

前田利長が「利勝」を名乗っていた頃の高畠石見守あての書状である。

利勝から利長への改名の時期は明確ではないが、『加賀藩史料』編外編では天正17年(1589)前後としている。

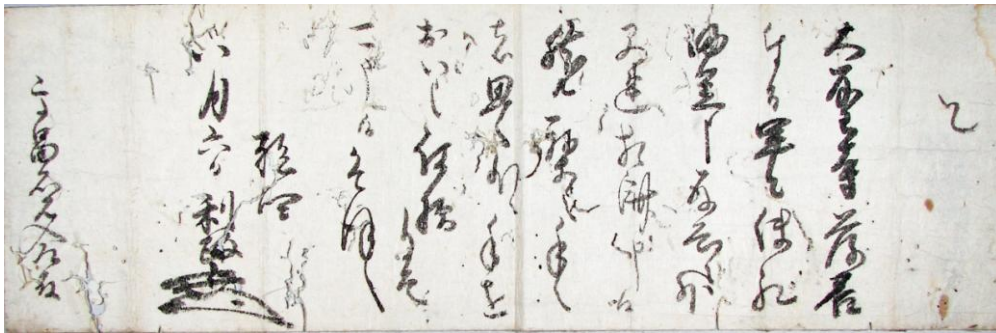
高畠定吉が通称を織部から石見守とした時期も明確ではない。「加藩国老叙爵考」(16.31-20)によると、文禄3年(1594)利家が権中納言に昇進したとき叙爵して石見守となったことを記し、さらにそれ以前の天正16年には石見守を使用していることを指摘している。

※折紙につき下段は上下反転してあります。

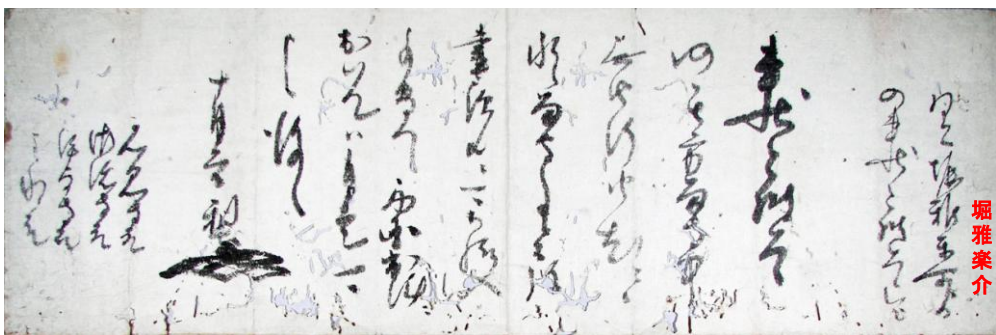


※折紙につき下段は上下反転してあります。

前田利長書状 大聖寺城責果之御見舞につき (090-1286-6)



前田利政書状 大聖寺到着之報知につき (090-1286-7)

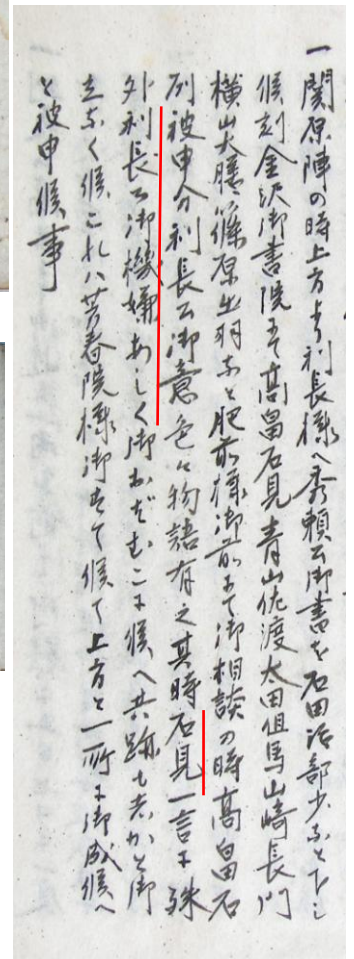


前田利長書状 留守中之儀指示につき (090-1286-11)

慶長5年(1600)の利長と弟利政の書状である。関ヶ原の戦いの時前田家は東軍として大聖寺城の山口氏を攻める。表紙の利政の書状もこの時のもので、石見守(入道)定吉が金沢城の留守を預かる城代を勤めていた。「入道」の表記は定吉が慶長4年利家が亡くなったとき法体となったためである。

表紙の7月25日の利政書状では明日出陣することが記されている。利長も26日に金沢を発ち、8月3日に大聖寺城を攻め、5日の利長の書状では堀・柵之普請のため利長が大聖寺城に留まることが記されている。前田軍は越前まで攻めるが撤退し、9日小松の丹羽軍と戦う(浅井暉の戦い)。丹羽軍を退けた利長は金沢へ向かい10日に帰城した。

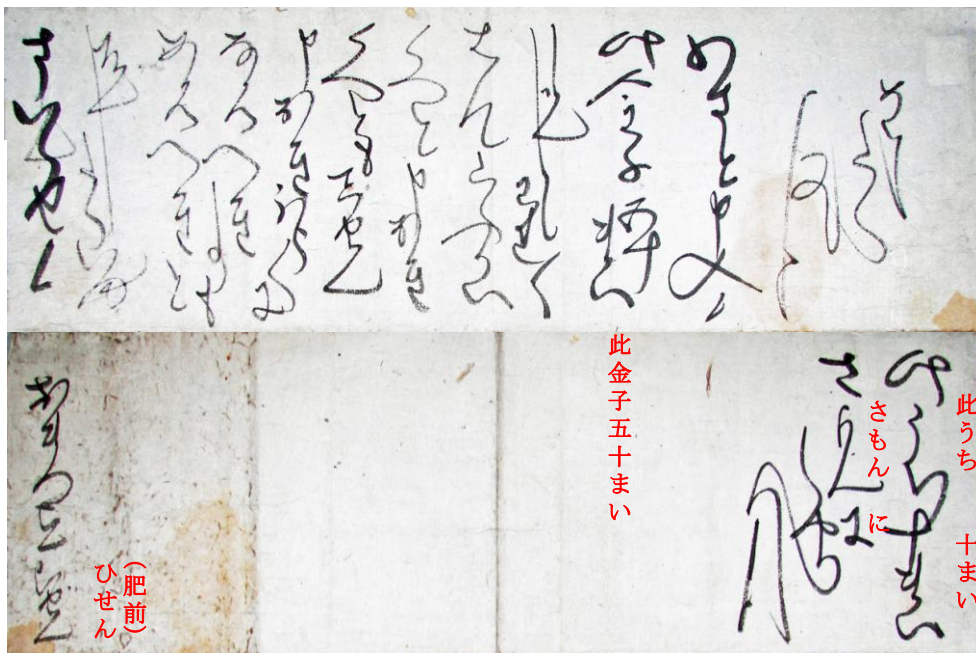
9月徳川家康の要請で利長は再び出陣したが、利政は出陣しなかった。10月2日の利長の書状は大坂から留守にしている金沢城の石見守等に出したものである。「堀雅楽介よりの書状」とある堀は、越後で東軍として上杉と戦い功を上げた堀直次(直清)のことである。17日大坂で利長は戦功を認められ加賀・能登・越中の領主となり、利政は能登を没収され京に移り剃髪した。



象賢紀略 (090-225)

石見守と利長が関ヶ原の戦いの時、意見の対立があったことが記されている。

※折紙につき下段は上下反転してあります。



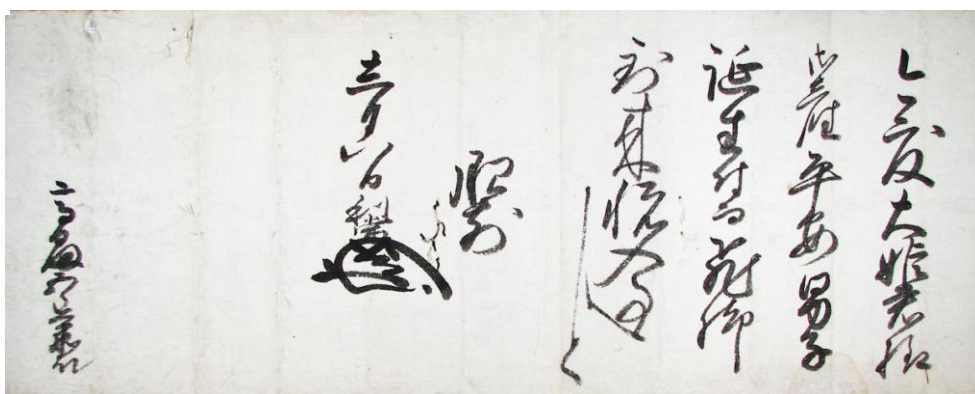
前田利長書状 金子贈につき (090-1286-11)

養女おまつ宛の利長書状である。おまつは定吉の養子定方に嫁ぐ。定吉には子が無く、慶長6年(1601)芳春院の命により青木善四郎の二男を養子にする。善四郎の室は定吉の養女で実は前田安勝の娘である。つまり前田安勝の孫が高島家を継ぐことになったのである。

定吉は翌7年病氣保養のため京へ移住し、剃髪し無心と号し慶長8年に没している。

定吉の養子左門定方は1万7千石の内千石のみを継ぎ減知となっている。後に大坂の陣の戦功にともない前田五郎兵衛安勝の名を得て五郎兵衛定方となる。

おまつ宛の利長書状は他に2通あり、石見守定吉の煩いの事を記したもの(090-1286-14)もある。



前田利常書状 綱紀誕生につき (090-1286-17)

寛永20年(1643)の3代藩主利常の書状で、宛名の高島五郎兵衛は定方の子定元である。

大姫(清泰院)は4代藩主光高の室、水戸徳川頼房の娘で、徳川家光の養女である。

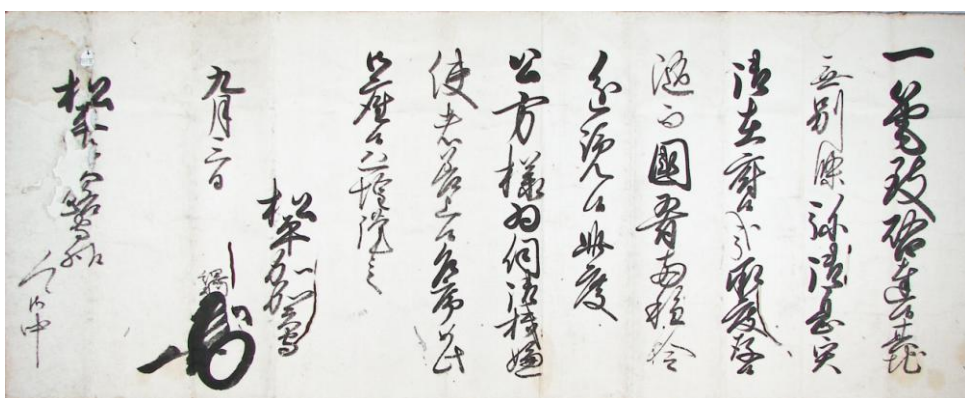
利常は寛永16年光高に家督を譲り小松城にいた。綱紀は寛永20年11月16日江戸で生まれている。



前田利治書状 道中煩之儀につき (090-1286-18)

初代大聖寺藩主利治の書状である。利治は利常の三男で、寛永11年(1634)飛騨守、寛永16年大聖寺藩主となり、万治3年(1660)に江戸で亡くなっている。

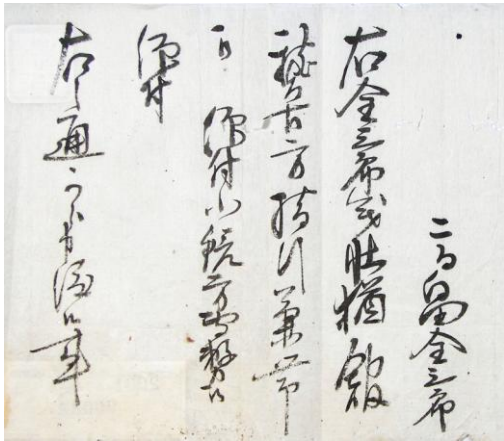
五郎兵衛は定元である。定元は寛永4年生で、元禄6年(1693)に亡くなっている。役義などは明確ではないが利常との関係が深かったようである。



前田綱紀書状 公方様御機嫌伺之使者差上につき (090-1286-19)

5代藩主綱紀が綱利を名乗っていた頃の書状である。承応3年(1654)加賀守綱利となり貞享元年(1684)正月綱紀と改めている。

松平淡路守は初代富山藩主前田利次で、利常の二男である。寛永8年淡路守となり、寛永16年富山藩主、延宝2年(1674)に江戸で亡くなっている。

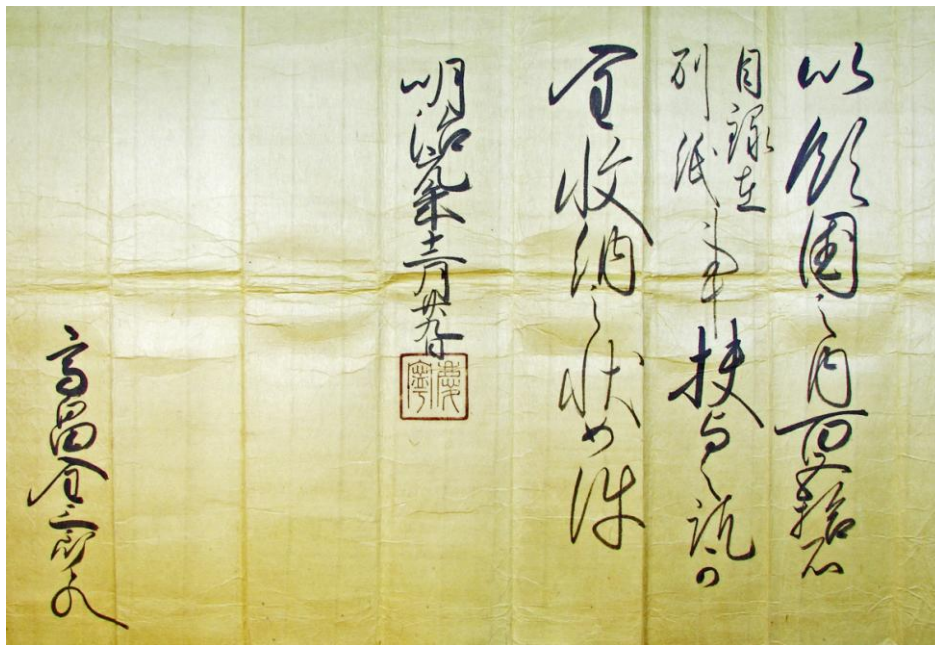


高島全三郎壯猶館稽古方指引兼帯および小銃方専務申渡写

(090-1286-41)



小川仙之助手合小隊司令役申渡書 (090-1286-49)

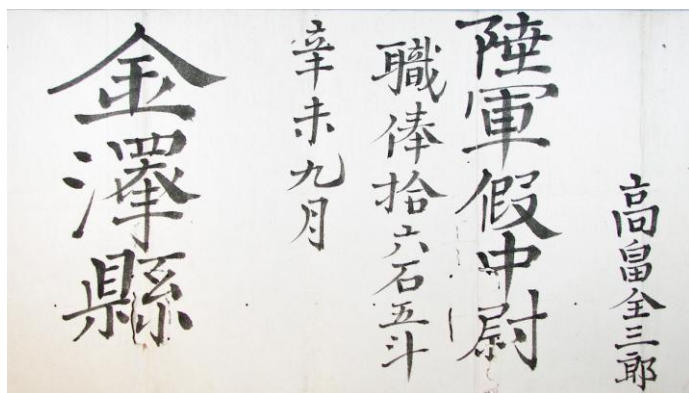


前田慶寧知行宛行状 (090-1286-55)

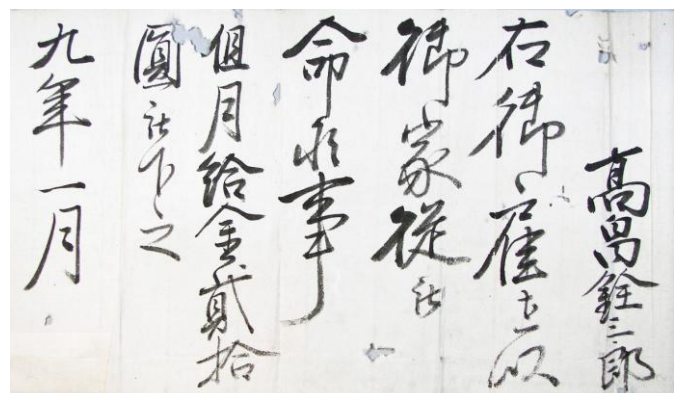
高島全三郎有恒は、権兵衛家の藩末・明治期の当主余所男政徳の弟である。

知行200石の権兵衛家の子弟として慶応元年(1865)5月新番組御歩に召出され、11月壯猶館砲術方稽古指引兼帯などに就く、明治元年(1868)閏4月小隊司令役として小川隊に属し、北越戦争で功績を上げる。その功績により新知150石が与えられた。

前田慶寧知行宛行状はその時のものである。慶寧は14代藩主で、慶応2年に家督を嗣ぎ、明治2年6月には藩籍奉還にともない金沢藩知事となっている。



陸軍假中尉任命状 (090-1286-76)



御家従雇状 (090-1286-86)

北越戦争以降の全三郎は、明治2年(1869)少隊長、4年陸軍假中尉、7年能登国第六区副区長、9年前田家の家従、20年学事委員など病気などの理由で辞職しても次々と役職が命ぜられている。